

国語

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学三年生の「ぼく」(ゆう)と小学六年生の姉(ひろ)は三年前の二月に病気で母親を亡くした。幼かった「ぼく」には母の思い出はわずかしが残っておらず、今年の三月に父と再婚した真由美さん(ママ)にもすぐになじむことができた。八月十三日、田舎から出てきた母方の祖母と一緒に盆を迎えた夜、「ぼく」も姉も母の夢を見た。「ぼく」は母の面影をはつきりと思いつけなかったが、姉は夢の中で母に甘えることができて幸せな気持ちになったという。翌日、姉はそれまでにないほど祖母になつて過ごし、その夜は布団を並べて寝たいと言いつ出した。

その夜は夢を見なかった。見たのかもしれないが、翌朝起きたときには忘れていた。

姉はまた母の夢を見たらしい。朝ごはんのあと、そばに祖母とぼくしかいないときに教えてくれた。ゆうべの夢もとてもくつきりして、母は幼い姉にとても優しくしてくれた、という。

ただし、姉は「ほんとだよ、ほんと」と何度も念を押す。だから、かえって、ちよつとだけ、嘘^{うそ}っぽく感じられた。

「ゆう、あんたは？」

「……見なかった」

姉は、ふうん、とA拍子^ア抜けしたようにうなずいた。

「じゃあ、おばあちゃんはお母さんの夢、見なかった？」

祖母は苦笑して「見とらん」と言った。「ひろちゃんがうらやましいわ。おばあちゃん、夢も思うようには見られん」あてがはずれた姉はムツとしてしまった。

「おばあちゃん、嘘つき。見てるくせに」

「嘘なんてついとらん」

祖母は笑顔で首を横に振る。

姉は口をとがらせて、*1精霊^{しんれい}棚^{たな}をにらむように見つめ、そのままの顔の向きで祖母に訊いた。

「お母さん、いま、ウチに帰ってきてるんだよね? そうだよね?」

「ほんまじゃ、ほんまに帰ってきてとるんよ。お盆には、みんな帰ってくるんよ」

「来年からも?」

「うん……帰ってくる」

祖母の声が少し揺れた。

「来年も、再来年も、その先も、ずーっと毎年、絶対に帰ってくる?」

「……うん」

声がかすれ、頬から笑みも消えた。

「ママがいるのに?」

返事が止まった。

姉は精霊棚から目を動かさずに「ママがいても、帰ってきてくれるの?」と訊いた。祖母と話していても、訊いている相手は母なのかもしれない。

姉の口が動いた。お母さん、と息だけの声で言った。祖母の耳には届いていなかったが、ぼくには聞こえた。お母さん、ずっとウチにいてよ、もうあっちに行かないでよ。姉は確かにそう言っていた。

①祖母はため息をついて頬をゆるめ、もう一度笑顔になつてから、言った。

「おばあちゃんがお盆に来るんは、今年で最後。来年からは、毎年二月に……ひろちゃんやゆうちゃんが忙しゅうないなら、二月に会おうな」

ぼくはびっくりして、「おばあちゃん、来年のお盆は?」と訊いた。

「田舎におる。おじいちゃんと一緒に*2迎え火^たを焚いて……お母さんが、帰ってくるけえ」

「ウチじゃなくて?」

「来年からは、お母さんの帰ってくる先が、変わるんよ。おじいちゃんとおばあちゃんのウチに帰ってくる。お母さんが子どもの

頃に住んどった家に、帰ってくるんよ」

姉は黙って、まだ精霊棚を見つめていた。驚いた様子はない。そうなることを最初からわかっていたのかもしれない。ぼくは話の意味がよくわからずにきょとんとしていたが、祖母の口調から、それはいいことなんだろうな、と安堵あんどもしていた。

「毎年アレかもしれないけど、たまにはお盆に遊びにおいで。お母さんも帰ってきてとるけえ、あんたら二人、大きいな場所を見せてあげて」

ぼくは「うん」とうなずいて応えた。

だが、姉は不意に声をあげて笑った。

「やだあ、帰ってくるわけないって、死んだ人が。そんなの迷信だもん。いまは冗談で言っただけ、昨日からずーっと冗談言ってるの。わかんなかった？　幽霊とか魂とか、そんなのないって、わたし知ってたよ、最初から。知ってる知ってる、そんなの世界の常識だから」

早口にBまくしたてて、ぶいっと顔をそむけるように棚の前から離れた。そのまま、祖母が呼び止める間もなく、走って部屋から出て行ってしまった。

その日の夕方、いつものお手伝いで精霊棚にお^aゼンゼンを運んだぼくは、棚のお供え物が一つ消えていることに気づいた。
*³なすびの牛がいなくなった。

誰が持って行ったのか、理由はなんだったのか、見当がつくから、父にも真由美さんにも祖母にも言えない。

姉は自分の部屋で勉強をしている。いまから部屋に行って問いただしても、正直に認めてくれるとはとても思えない。

台所に戻った。包丁を使っていた真由美さんの背中に「お供えしたよ」と声をかけた。なるべく明るい声を出したつもりだったのに、真由美さんは「あれ？　どうしたの？」と振り向いた。「いまの声、元気なかったけど」

目が合った。すぐにそらした。だが、真由美さんは「忘れ物しちゃったときの顔みたい」と笑って、包丁を置いてぼくに向き直り、「なにかあったの？」と訊いてきた。

声も顔もごまかせなかった。驚いて、あせって、戸惑って、恥ずかしさに逃げ出したくなって……その思いが裏返って、困っているのを感じてもらったことにほっとした。隠そうとしてもだめだった、見抜かれてしまったというのが、むしろにうれしくなった。

真由美さんはぼくのすぐ前まで来ると、しゃがんで目の高さを合わせ、「ママにも教えて」と言った。遊びの仲間に加わるみたいな言い方に、思わずクスツと笑って、頬の力が抜けたせいで、涙が出てしまった。

真由美さんはぼくの話、最初から最後まで、笑顔で聞いてくれた。話が終わったあとも「うん、わかった、オッケー」と、迷ったり悩んだりはしなかった。

「あとはいじょうぶだから、心配しないでいいから、ママに任せて」

「お姉ちゃんのこと……」

怒らないでね、とぼくが言うより先に、真由美さんは「怒るわけじゃない」と、おかしそうに笑って言った。「ひろちゃんのこと、ママ、もっと好きになった」

「……ほんと？」

「ほんとだって。ひろちゃんのこと、ゆうちゃんのこと、いままでより、もっともっと好きになった」

でも、と真由美さんは続けた。

「お盆のおかげで一番好きになったのは、二人のお母さんのことかな」

②そう言って、腰を伸ばし、遠くを眺め「ちよっとうらやましい」とつぶやいた。

真由美さんは、なすびの牛がいなくなった棚をそのままにしておいた。十五日の夜も、今日——十六日の朝も、午後も、変わらない。夕方、そろそろ送り火を焚く準備を始めようかという頃になってもまだ、きゅうりの馬の横は空いていた。

父も祖母もなにも言わない。きつと、真由美さんが二人に話して、相談をして、決めたのだろう。

姉は、今日の午前中は部屋にこもって宿題をして、午後からは友だちと遊びに出かけた。前から約束していたのではなく、急に思い立って仲良しの子に電話をかけて誘った。お盆休みで断られどおしのすえ、やっと一人、本屋に付き合ってくれる子が見つかったのだ。

父も祖母も真由美さんも、姉が片っ端から電話をかけるのを見ていた。話し声も聞いていた。だが、なにも言わない。出がけに父が一言「五時に送り火を焚くから、それまでには帰ってこいよ」と声をかけただけで、姉は気のない声で「はい」としか応えなかった。

夕方五時前に、祖母は帰り**bj**ジタクをととのえた。門の前で送り火を焚いてから、バスで駅に向かい、夜行列車で田舎に帰るのだ。また来年のお盆も来てね、というお別れのあいさつはできない。姉とぼくに話してくれたとおり、祖母が我が家でお盆を過ごすのは今年が最後だ。母を迎える場所も、来年からは田舎の祖父母のウチになる。祖母は、父や真由美さんと、お盆の前にそういう話し合いをしていたらしい。

五時のチャイムが鳴った。姉はまだ帰ってこない。父は「しかたない、おばあちゃんのバスの時間もあるから、焚こう」と言っ**て**ぼくと二人で門の外に出て、送り火の準備を始めた。

素焼きの*4 炮烙ほうらくに新聞紙を丸めたものを置き、その上にかぶせるように、オガラを数本ずつ、縦横交互にやぐらを組んで載せていく。先に新聞紙に火を点けたほうがオガラが燃えやすくなるのだ。

炮烙の前に二人並んでしゃがみ込み、手順を説明してくれる父に、ぼくは訊いた。

「なすびの牛がいなくても帰れるの？」

父は「だいじょうぶだ」と、ぼくの頭に手を載せた。「おばあちゃんが、ちゃんと田舎まで連れて帰ってくれる」

「死んだ人の世界に帰るんじゃないの？」

父は、あ、そうか、と自分の間違いに気づき、決まり悪そうな顔になったが、すぐに「おじいちゃんもおばあちゃんも年寄りだから、似たようなもんだ」と笑った。

おばあちゃんにはナイショだぞ、と指を立てて口止めされたので、ぼくも笑い返してうなずき、念を押して訊いた。

「来年から、お母さん、もうウチには帰ってこないんだよね」

「ああ……帰ってこない」

③ 父の口調は静かだったが、きつぱりとしたものだった。その代わり、しょんぼりするぼくの頭を、少し乱暴に、こするように撫でながら、つづけた。

「帰ってこなくても、いるんだ、ずっといるんだ、お母さんは」

「……どこに？」

父は頭に載せた手はずし、「ここだ」という一言と同時に、ぼくの背中——胸の真裏を、軽くポンポンと叩いた。そして、「おう」と、ぼくではなく、もつと遠くに向かって声をかけた。

「お帰り」

少し離れたところに、自転車にまたがった姉がいた。姉は黙って、ブレーキのレバーから手を離し、ペダルを一漕ぎして、家の中に入った。

しばらくたって、新聞紙に点けた火がオガラに燃え移った頃、玄関の引き戸が開いて、祖母と真由美さん、そして姉が連れ立って外に出てきた。

祖母はもう旅行鞆かばんを提げている。このままバス停に向かうのだ。祖母の目は赤く、ウルンでいた。真由美さんはこにこ笑っていて、姉はすねたようにうつむいていた。

「なすびの牛、ちょっと太って帰ってきたよ」

真由美さんはうれしそうに父に言った。

「ひろちゃんがな、八百屋さんで買うてきて、割り箸も貰うてきて、もういっぺん作ってくれたんよ……お母さんのために、帰ってきてくれてありがとう、言いながらな……」

祖母は話しながら、泣きだしてしまった。

姉はあいかわらずすねている。

炮烙の上で、オガラの炎がひときわ大きくなった。煙はほとんど出ていないのに、父は「煙い煙い」と怒ったように言いながら、目を腕で何度もこすった。

オガラが、ぱちん、と爆ぜる。

祖母は、バス停まで見送りに行くというのを断って、一人で歩きだした。最初のうちはぼくの「ばいばーい」の声に振り向いて手を挙げて応えてくれたいたが、途中からはずっと前を向いたままで歩きつづけた。

バス停へは、ウチの前の通りをまっすぐ歩いて、三つめの角を曲がる。二つめの角を過ぎた祖母の背中はずいぶん小さくなった。もう声をかけても届かない。

オガラがまた、かすかな音をたてて爆ぜる。

ふと見ると、姉は顔を上げて、遠くの祖母を見つめていた。お別れするときには一言もしゃべらなかったのに、いまはじっと、泣きながら、祖母と——もう一人を、見送る。

ぼくもそうした。

祖母は三つめの角に差しかかる。最後の最後にこつちを向いてくれるだろうかと思っていたが、祖母はすっと、そっけないほどあ

つさりと角を曲がって、ぼくたちの視界から消えてしまった。

代わりに、ぼくの名前を呼ぶ声が聞こえた。誰のものかは思いだせない、けれどむしろに懐かしい響きの声だった。ほんのdイツシュンだけのことだ。聞いたそばから消し去られてしまう声でもあった。

姉と目が合った。姉も同じ声を聞いたのか、たくさん泣いたあとで美味しいケーキを食べたような顔で笑った。

「よし、燃え尽きたから、今年のお盆はこれでおしまいっ」

父が言った。真由美さんが「お風呂 e ㍉」いてるから、どっちか先に入っちゃいなさい」と姉とぼくに言った。

二人の声は、いつになく、くっきりと大きく耳に響いた。それに応えるぼくたちの「はい」の声も、嘘みたいにきれいに揃った。そら

真由美さんもびっくりして「おーっ、さすが仲良しきようだいだね」とほめてくれた。

姉とまた目が合った。

姉は、ぼくに「あっかんべえ」をして、真由美さんに向き直った。

「④ ママ、わたし先にお風呂入るね」

家の中に駆け込んだ。

「サンダルで走ったら転んじゃうよお」

苦笑交じりに姉の背中に声をかけた真由美さんは、父に「ママ、だって」と照れくさそうに言って、それから、顔を伏せて、両手で覆った。

(重松清「かぞえきれない星の、その次の星」より)

＊1 精霊棚：盆に祖先の霊を迎えるために準備する棚。祖先の位牌を安置し、季節の野菜や果物を供える。

＊2 迎え火：盆に入る日（八月十三日）の夜、祖先の霊を迎えるために家の門口で焚く火。皮を剥いだ麻の茎（オガラ）などを燃やす。また、盆の終わり（八月十六日）の夜には、祖先の霊を再び死者の世界に送り返すための「送り火」を焚く。

＊3 なすびの牛：精霊棚には、きゅうりとなすに短く折った割り箸などで脚をしつらえた飾りを置く。祖先の霊が来るときにはきゅうりの馬で速く、帰るときにはなすの牛でゆっくりと行ってほしいという願いが込められている。

＊4 焙烙：浅い土鍋。

問1 線部 a e のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 線部 A・B の本文中における意味として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

A 「拍子抜けしたように」

- ア 勝ち誇ったようすで
- イ ばかにしたようすで
- ウ がっかりしたようすで
- エ 自信をなくしたようすで
- オ びっくりしたようすで

B 「まくしたてて」

- ア 怒りをにじませながら大声を出して
- イ 勢いよく一方的にしゃべって
- ウ 取り繕うように言葉をつないで
- エ 笑いをかみ殺しながらつぶやいて
- オ 聞き取れないように言葉をぼやかして

問3 ―線部①「祖母はため息をついて頬をゆるめ、もう一度笑顔になってから、言った」とありますが、このときの祖母についての説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 娘の死からたった三年でその夫が再婚したことには納得がいかないが、自分の味方をしてくれている孫娘の様子を見て気持ちを切り替え、娘の思い出をいつまでも大切にしていくと孫たちに約束しておこうとしている。

イ この家で盆を過ごすのは今年が最後であるが、亡くなった母の霊が今後も家に帰ってくると健気^{けなげ}に信じる孫娘の様子を見ていじらしく思い、彼女がその気持ちを持ち続けられるように言葉をかけてあげようとしている。

ウ 孫たちと盆を過ごせなくなるくらいのことです寂しさを感じている自分を笑いたくなったが、その事情をそれとなく察しているような孫娘の様子を見てかわいそうに思い、自分の寂しさを孫たちに悟られないように会話を続けようとしている。

エ 今年もこれまでと同じ自然な態度で盆の季節を送ろうと思っていたが、今後は縁が遠くなるという事情を薄々察しているらしい孫娘の様子を見てそれが無理であると悟り、孫たちが不安にならないように説明しておこうとしている。

オ 娘の夫の再婚によって新しい家族が誕生し、今後は縁が遠くなるのは残念だが、その事情をはっきりと理解している孫娘の大人びた様子を見て頼もしく思い、今後は娘とともに遠くから成長を見守っていると伝えようとしている。

問4 ―線部②「そう言って、腰を伸ばし、遠くを眺め「ちよつとうらやましい」とつぶやいた」とありますが、真由美が「ちよつとうらやましい」とつぶやいた」のはなぜだと考えられますか。九十字以内で説明しなさい(句読点も一字に数えます)。

問5 ―線部③「父の口調は静かだったが、きつぱりとしたものだった」とありますが、このときの父についての説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 亡くなった前妻のことは忘れられないが、これからは死者の霊が盆に帰ってくるなどという迷信とは縁を切った生活をしている。こうと氣を引き締めている。

イ 亡くなった前妻の思い出は胸の中に大切にとどめつつ、真由美や二人の子どもたちと一緒に新しい家族として出発することに對してゆるぎない決意を抱いている。

ウ 新しい家族の生活が始まった家に亡くなった前妻の思い出が残っていることが氣になって晴れない気持ちでいたが、それを完全に取り払おうと強く覚悟を決めている。

エ 真由美のことを愛しているのはもちろんだが亡くなった前妻のことも大切に思っているので、盆の行事をしなくても、心の中に存在する彼女を感じられるようになると決意している。

オ 再婚して新しい家族としての生活が始まったので、今後、家族では盆の行事はしないで自分一人で静かに亡くなった前妻を思い出すようにしようと決心している。

問6 ―線部④「ママ、わたし先にお風呂入るね」とありますが、ここで姉はどのような気持ちになったと考えられますか。変化の経緯も含めて、百字以内で説明しなさい(句読点も一字に数えます)。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい（設問の都合上、省略した部分があります）。

近年、スマートフォンでのやりとりで、通信文の最後にいろいろと絵文字と呼ばれる⁽¹⁾のような表情をあらわす字が見られるようになった。文章を打ち込めばすむのに、それでは足りず、文章を打ち込んだあと、プラスアルファの意味やニュアンスをなんとか付け加えようとする。多少はこれは^{*1} ^{あしで} 輩手の伝統と関わるかもしれない。輩手とは半分文字で、半分絵でもある文字のことであるが、今なお輩手を^{*2} ^{ほうかつ} 彷彿させる文化的なとнамиがつづけられている。その表現衝動はおそらく輩手の歴史からくる。

輩手は、文字の中に溶け込む絵、絵の中に溶け込む文字、つまり半絵・半文字である。このような文字による表現が重要な役割をはたしていた時代があり、そしてそれは、和歌と共存していた。

実のところ文字とは厄介なものである。漢字は、「二字が一語」という文字の^a ゲンシヨ的な構造を保存しつづけた世界唯一の文字であり、ひとつの文字がひとつの意味をもつ。たとえば、「雨」は一字で一語。ひらがなでは「あめ」と二字で一語である。さらに英語の場合には^{han}と、四字集まって一語となる。

文字の本質はあくまで言葉であることに存する。文字は言葉そのものである——これは、東アジアでは明確に言いうる。文字は言葉になることをもってしか文字でなく、言葉になりえないものは文字ではない。

なるほど言（話し言葉）にとつて声は不可欠である。言葉を発するときに声がなければ言葉は存在しない。身ぶりや表情、気配などからなる以心伝心という表出とも^{キョウジュ}も周辺につきまとうが、少なくとも声があれば話し言葉（言）は成立しない。しかしより深く考えてみると、声がない方が言葉にとつては都合がよいともいえる。言葉の意味やよつてきたところ、香りや味わいまでを^c ジュウゼンに伝えるためには、声の高さや強さや響きなどその表現全体が必要だが、その表現がかならずしも声である必要はない。理想としては、声などなく伝われば、それがいちばんよいのである。事実、愛し合ったふたりには言葉などいらぬ。何もいわなくてもそこで意思は通じ合っている。黙っていても、それで通じ合うのが^① 表現の理想形であるのかもしれない。

一 文（書き言葉）にとつて文字は不可欠である。しかし声と同じで、本当は書くこと、書いた跡の別名である文字などない方がよいのかもしれない。^{*3} ワープロが生まれ、パソコンが普及した大きな要因は、自分の書いた字、文の書きぶりに投影された複雑な心情の^{*4} 積畳を「下手」「無駄」と錯誤し、醜くてみたくもないと思つていたからかもしれない。

二、文字などない方がよいけれど、文字がなければ言葉は伝わらない。そうすると、^d ソザツな^{*5} フォントであっても、いやで仕方のない「下手」な自分の字で書くよりも、パソコンで自らの肉性を消しておいた方がまだましだと考えるようになった。書き手の無意識や本心が現れる文字を「下手」「無駄」と誤解して嫌悪したからである。かくて^② 「下手」な字が消え、「上手」な字も消え、生きた肉文字が身辺から遠ざかり、やがて文字（文や詩）が消えていく現在が生まれてきた。

言葉は矛盾した存在である。真の表現や伝達のためには声も文字もない方がよいのだが、声や文字がなければ言葉は存在しえない。声の表現は、声の届く時空にかぎりがあるが、文字は時空を超える、現在目の前にいる人ではなく、将来や遠い未来に向けて書き残すこともできる。

三、私が大学で講義をしているときは、学生たちの顔を見ながら、どれぐらい理解しているだろうか、話にひきつける力が弱く退屈していないだろうか、と考えながら、その都度表現を工夫しながら話をしていく。ところが文（書き言葉）の場合には、具体的な相手が目の前にいないため、時間的、空間的に遠くに向けて書いていくことができる。その引き換えとして、過去の歴史的な思索の成果をふまえないわけにいかない。あるいは何十年、何百年先の人が読むかもしれない可能性も前提とすることがある。この意味で、声は具象的だが文字は抽象的であるともいえる。人間の言葉は「はなす（声）」ことと「かく（書、文字）」ことの矛盾に存在しつづけている。

日本では、現在のところ抽象性の極^{きわみ}にある文字は^{*6} 明朝体活字である。^③ この印刷書体も具象的な姿があるが、読んでいる側は、存在しないかのごとくそれを読んでいく。日本でその「気にさわらない書体」に^e カタクされているのが明朝体活字である。本を読むときにもしも、いちいち活字の形姿にひっかかっているのは本など読めはしない。文字に目をとめていきながら、しかしそれはあたかもないかのごとく、そこに展開されている言葉の世界の中にすつと入る必要がある。形がないかのようにふるまうのが、究極の明朝体の姿である。理想の明朝体は、読んでいるときは存在しないかのようににはたらく文字である。

反対側の極にあるのが、本物の文字、肉文字＝手書き文字である。そこには、声と同様にさまざまな微細^{ほしじょう}にして豊穡な表現（^{*7} ^{おもしろい} 夾雑物）、重層的な意味の厚みや意味の来歴が盛り込まれている。その手書き文字がもつ多様で多彩な表現の中から一面のみを肥大化して伝えたのが印刷活字であり、文字の具象性を露骨にさらすデザイン文字である。たとえば^{*8} ゴシック体は筆画の太さに特化した文字である。そのような文字の具象性、図象性を拡大して平安時代に成立したのが輩手であった。輩手の延長線上に、『ドラえもん』の^{*9} 意匠文字があり、あるいはSNSでも多用される顔文字などがある。日本が得意だといわれているマンガ的記号表現を生みだしてきた基点は輩手の表現と思想にあるかもしれない。

（石川九楊「ひらがなの世界——文字が生む美意識」より）

- *1 葦手…平安時代に用いられた装飾的な仮名書体の一種で、後に示す【図1】のようにひらがなの「あ」の字画が葦の葉の形をしているように絵と文字が組み合わせあったものをいう。
 - *2 彷彿させる…ありありと思ひ浮かばせる。
 - *3 ワードプロ…文章作成に特化した機械のこと。ワードプロセッサの略称。
 - *4 積畳…多く積み重ねること。
 - *5 フォント…印刷に用いられる、文字の形やデザインのこと。
 - *6 明朝体…日本の新聞・雑誌・書籍によく用いられる活字書体の一つで、この試験問題の文章も明朝体で書かれている。
 - *7 夾雑物…あるものの中にまじっている余計なもの。
 - *8 ゴチック体…明朝体と同様に、日本の新聞・雑誌・書籍によく用いられる活字書体の一つで、次の例に示すような書体を指す。
- (例) 大阪星光
- *9 意匠文字…形や模様などを装飾的に加えた文字。後に示す【図2】のように『ドラえもん』のマンガ本のタイトルでは、「ド」の濁点が二つの目になり、「え」の第一画が鈴になっている。



【図1】葦手で書かれた「あ」



【図2】『ドラえもん』のマンガ本のタイトル

問1 〓線部 a ʘ e のカタカナを漢字に直しなさい。

問2

一

目

 に入る言葉として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい (ただし、同じ記号は二度使えません)。

ア つまり イ 同様に ウ しかし エ たとえば オ なぜなら

問3 〓線部①「表現の理想形であるのかもしれない」とありますが、それはどういうことですか。筆者の考えの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 我々は言葉のニュアンスを余すところなく伝えるために声の出し方に様々な工夫を施すが、黙って通じ合うことができたなら、それはかえって声に依存していないという点で言葉の理想的な形であるということ。
- イ 発した言葉のすべてを我々が分かり合うためには、声の高さや強さや響きなどが必要不可欠なので、何も言わずに意思が通じ合うことなど現実には起こり得ないという意味で理想に過ぎないということ。
- ウ 声を発することが言葉のすべてを伝える上で最も確実な方法だが、何も言わなくても分かり合うことができれば、声の高さや強さや響きなどに気を遣う必要がなくなるという点で理想的であるということ。
- エ 理屈上、声の高さや強さや響きなどに頼らなくても言葉のすべては伝えられるのだが、話しことばには声が必要不可欠なので、声を介して通じ合うことが現実生活を送る上での理想だと言わざるを得ないということ。
- オ 言葉の要素をすべて伝えるのに声の力だけでは不十分であり、ましてや何も言わずに我々が分かり合うのは不可能であるため、身振りや表情、気配などを使って表現することが理想であるということ。

問4 〓線部②「下手」な字が消え」とありますが、「下手」な文字が消え」とはどういうことですか。六十字以内で説明しなさい (句読点も一字に数えます)。

問5 ―線部③「この印刷書体」とありますが、それはどういうものですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 装飾的な形の活字で、優美でひかめな印象の字体であり、時代や場所が遠く離れた人にもその印象が薄れることのない「明朝体」という書体。
- イ 広く一般的に用いられる活字で、歴史的な思索の成果を踏まえて、その時代や場所で深められた文化を伝えることのできる「明朝体」という書体。
- ウ 活字の形姿そのものに個性がなく、言葉の世界に集中する助けとなり、時間や空間が隔たった人に向けて書くのに適した「明朝体」という書体。
- エ 書き手の感情がその活字の形に表され、時代や場所が変わっても書き手の姿を具体的に思い浮かべながら読み進められる「明朝体」という書体。
- オ 印象に乏しい活字で存在感に欠けるため、伝えようとする内容を何十年、何百年先の人にまで正しく伝えるには不十分な「明朝体」という書体。

問6 ―線部「その表現衝動はおそらく葦手の歴史からくる」とありますが、それはどういうことですか。百字以内で説明しなさい(句読点も一字に数えます)。